

NPO法人越谷市郷土研究会主催
創立45周年記念 第411回史跡めぐり

常陸まほろば路の悠々探訪

実施日 平成22年12月10日(金)

コース

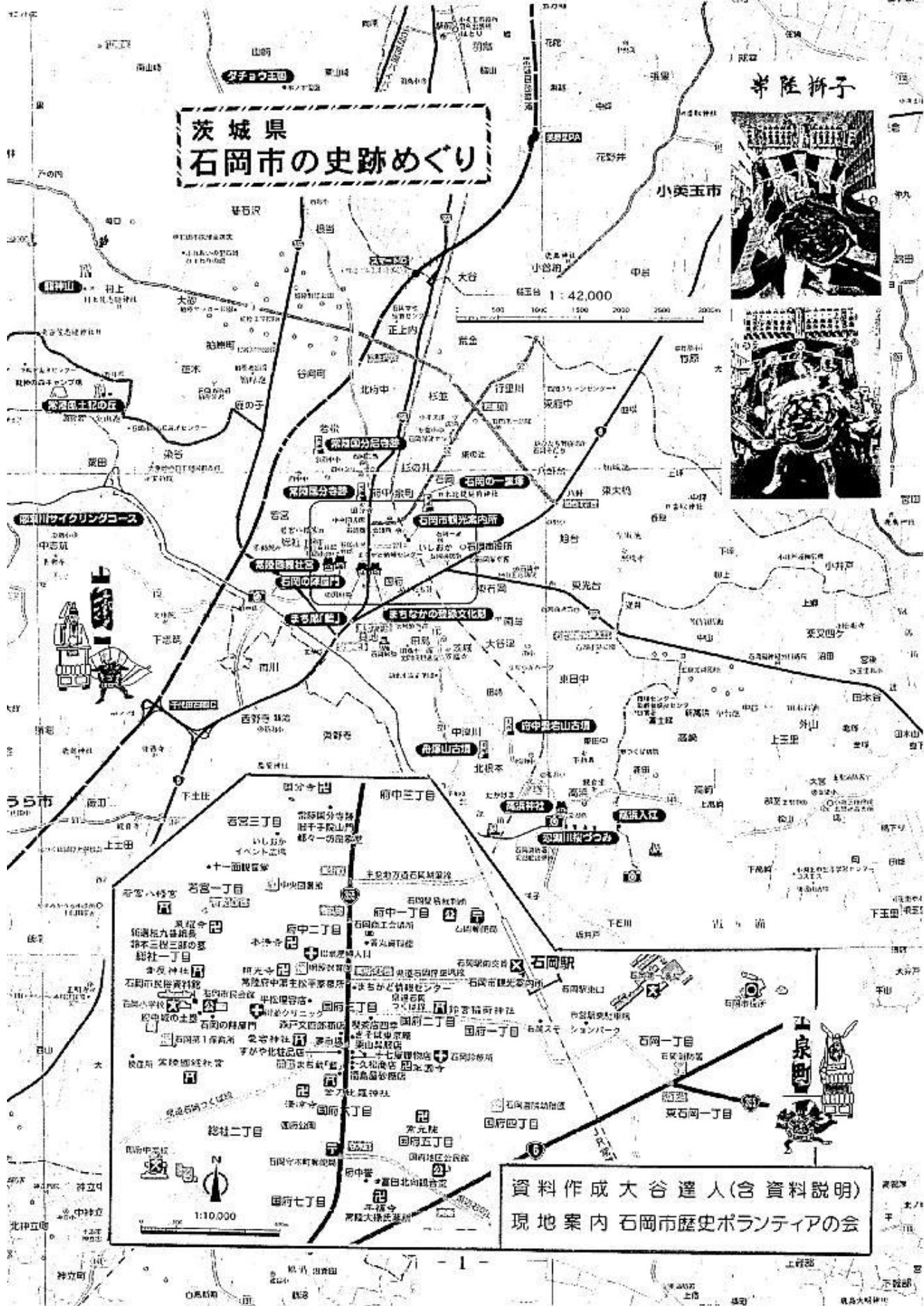
南越谷駅前発8:30(貸切バス)→外郭環状道路→常磐自動車道→旧水戸街道
→石岡市民俗資料館→常陸国衙・府中城跡・府中松平家陣屋門→常陸国総社宮
→常陸国分僧寺跡→昼食(割烹寿し長)→常陸風土記の丘→常陸国分尼寺跡
→府中一里塚→船塚山古墳→南越谷駅前着(17:00頃を予定)



写真上 常陸国総社宮
写真下 総社宮大祭

茨城県 石岡市の史跡めぐり

半陸獅子



石岡市観光案内

石岡の歴史

石岡の文化

石岡の自然

石岡の産業

石岡の交通

石岡の観光

石岡の歴史

石岡の文化

石岡の自然

石岡の産業

石岡の交通

石岡の観光

資料作成 大谷 達人(含資料説明)
現地案内 石岡市歴史ボランティアの会

石岡市

石岡市の総面積は215.62km²、2010年10月1日現在の総人口は80,424人(男39,966、女40,458)、29,186世帯、人口密度は366人/km²という。

石岡市は、茨城県のほぼ中央に位置し、西には875.9mの筑波山が平地に囲まれて高山の趣を呈し、東には我が国第2の大湖霞ヶ浦の西浦に臨む台地状に開けた場所である。旧石器時代からの遺跡が発見されており、4～6世紀の古墳時代には、県内最大規模の舟塚山古墳をはじめ、愛宕山古墳、要害山一号墳など数多くの古墳群や、砂鉄を原料とした製鉄工房跡の鹿の子遺跡に見られるように、早くから各地に豪族が勢力を伸ばしていた。

大化の改新(西暦646年)後は常陸国の国府が置かれ、国分僧寺、国分尼寺が建設されるなど常陸府中とか常府などと呼ばれ、以来常陸国の中心地になった。奈良の都は710年に置かれたが、それより以前に「東の都」として栄えた。「潮の香漂う丘」石岡は、1300年の時を経て、茨城県から唯一「歴史の里」の指定を受けている。

この間、平将門に国衙を焼かれ、一時表舞台から姿を消したが、南北朝時代に至り平氏同士^{クニノミヤノ}の争いから桓武平氏の名門常陸の豪族・大掾詮国が府中城を築き、8代に亘り約240年支配した。

しかし、常陸太田の清和源氏の直系・佐竹氏に水戸・馬場城を追われ、石岡も攻略されて大掾氏は失脚。その佐竹氏も戦国時代を制したが、関ヶ原の合戦では西軍に与したことから、家康より秋田へ転封され10年の短命で終わる。

以後、慶長6年(1602)、旗本六郷政乗が新封され常陸府中藩を成すも、元禄13年(1700)、松平頼隆(水戸徳川家分家、2万石)が入封し明治を迎える。

明治2年(1869)版籍奉還により石岡藩と改称。城下町の府中も石岡と改名。明治22年(1889)町村制施行により新治郡石岡町、高浜町、三村、関川村が成立。昭和29年(1954)市制施行し石岡市となる。その後、平成17年(2005)八郷町を編入し今日に至るが、市内の町名には府中、総社、国府など今も残る。

主要道路は、水戸市や土浦市をはじめ、鹿島、鉾田、笠間、筑西市など各方面へ通じており、また霞ヶ浦に面していることから水利の便も良い。

観光地としても多くの古い史跡や景勝地があり、石岡から眺める筑波山は古来、常陸一といわれる。また、良質の米と水に恵まれ、昔から清酒の醸造が盛んで、「関東の灘」といわれる銘酒の産地であり、伝統の醸造技法を生かして醤油や味噌の生産も行われている。他に、製糸・製綿・製氷や鉄工業などもあるが、筆筒や下駄などの桐材加工業もこの町の特色になっている。



茨城県石岡市位置図

常陸国

大化の改新に伴う国郡制度では、大化(645-50)以前の新治・筑波・茨城・仲・久自・高の6国(旧事本紀)のうち、仲は那賀、久自は久慈、高は多珂と改め、それに香島が加わり7評(郡)となって常陸国の管轄下に入った。

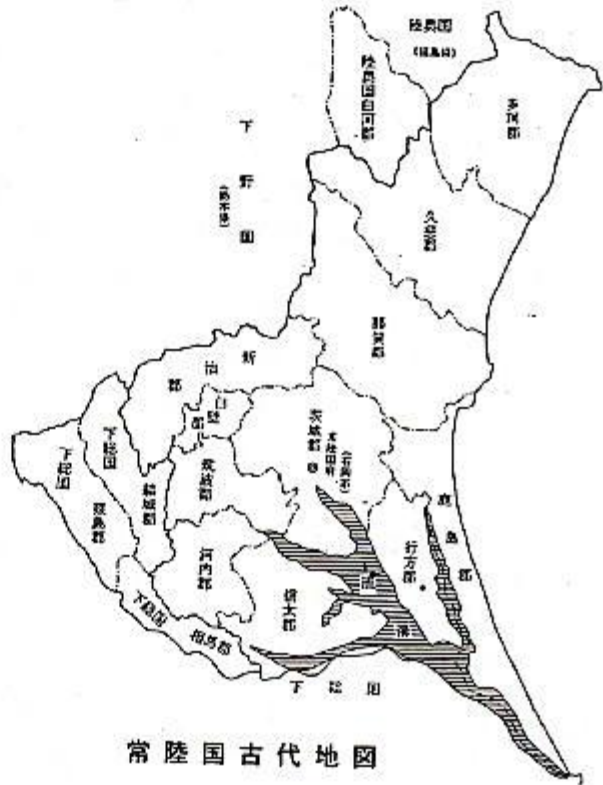
白雉年間(650-655)には12評になったが、和銅年間(708-715)には評が郡となり、新治・筑波・信太・茨城・行方・香島・那賀・久慈・多珂・白壁・河内の11郡となった。白壁郡は後に真壁郡、香島郡は鹿島郡となる。

平安時代には、上総国、上野国とともに天長3年(826)より親王任国(1)になり、常陸太守が任地に赴くことはないで、国司の実質的長官は常陸介であった。

律令制による国郡支配が解体した平安時代末期以降は、荘園の分立や郡の分割が進み、16世紀末に実施された太閤検地では、細分化された郡や荘を再編成して古代の

郡の復元が図られたが、その領域はかなり相違している。近世から近代の郡制施行による再編を経て21世紀初頭まで続いた常陸国内の郡の区分と領域は、太閤検地による再編を基礎にしている。

注(1) 桓武天皇は、多くの皇子に充てる官職不足から、国司に任じる制度を定着させた。赴任先は常陸、上総、上野の3国で太守と称し、他の国司より高い地位に置いた。常陸国には天長3年(826)第10皇子の賀陽親王が初めて任じられた。尤も、親王太守は、現地に赴任しない遥任だったため、親王任国の実務上の最高位は、次官の国介が当たった。



常陸国古代地図

国名・県名の由来

1 常陸名の由来

①道路の途中に海・河の渡しがなく、郡郷の境、山河の峰谷に続いており「直道」に由来するという説(常陸風土記)。②倭武天皇(日本武尊)が新治の県で清い泉に衣の袖を垂らして濡らしたという故事から「衣袖清の国」としての英雄伝説(常陸風土記)。③東北地方を広く「日高見国」と呼び、そこへ通う路=日高見路が「ひたち」となり、常陸の字が当てられたという説などがある。

2 茨城名の由来

①山の佐伯、野の佐伯という土蜘蛛(辺境の民)を退治するため、黒坂命は茨棘を住処の洞窟に詰め込んで殺した佐伯服従伝承(常陸風土記)。②山の佐伯、野の佐伯の賊長が国中で乱暴を働くため、黒坂命が茨で城を造って制圧したという説(常陸風土記)。③「道の辺の茨の末に這は豆のからまる君をはかれが行かむ」の防人歌を採った説(万葉集巻20の4352)などがある。茨城県花はバラ。

石岡市民俗資料館 石岡市総社1-2-101

常陸国衙や府中城のあった場所に昭和48年(1973)に建設。1階は、平成10年(1998)から19年(2007)に亘って発掘調査された常陸国衙跡の出土品や写真パネルなどを展示する他、舟塚山古墳や鹿の子遺跡などの出土遺物も展示する。2階は、農機具や商都として栄えた石岡関連の民俗資料と、奈良・平安時代を中心に市内の遺跡から出土した考古資料を展示する。

収蔵品の内訳は、民俗資料が約270点、考古資料は350点(内、縄文時代のもの約80点、弥生時代が約20点、古墳時代は約50点、以降のもの約200点)。

入館料は無料、開館日は金・土・日・祝日(見学は事前予約が必要)。所管は、教育委員会生涯学習課、管理は、石岡市歴史ボランティアの会。



常陸国衙跡 石岡市総社1-2

国府は古代諸国の行政官庁で庁舎を国衙、その所在地を国府と称した。中央政府から国府に派遣された役人を国司と呼び、守・介・掾・目の4等官に分かれていた。一般事務を司る者は地方から採用した。常陸国府の成立は、7世紀後半から8世紀初頭頃といわれる。国府の下に郡衙が置かれ前記の11郡を郡司が治めた。大国としての常陸国府は、正方形の地域を碁盤の目のように地割りし、小規模ながら平城京を思わせ、官人や兵役・雑徭で集まる農民で雑沓したであろう。

国衙の南に隣接して常陸総社宮、東北方に国分僧寺、西北方に国分尼寺、東方に馬家、西方に軍団があった。平安時代には更に、税所・健児所・朝集所・目代などの官衙が置かれた。

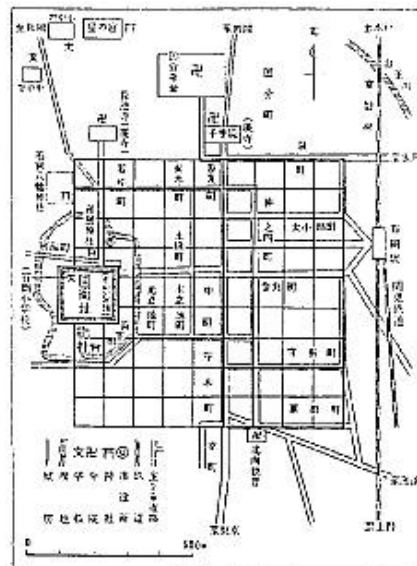
国府の中心である国衙は、現石岡小学校一帯であろうと推定されていたが、平成18年(2006)の第6次調査で、東脇殿と築地堀の遺構が明らかになり、以前に発掘した正殿、後殿、楼閣、西脇殿と併せ、建物跡が東西対象位置に配置されていることや国庁・曹司など中心部の建物(1)が解った。

専門家による「常陸国衙調査指導委員会」は一帯の100m四方を国庁跡と断定。全国では、17例目、遺跡調査の開始から丸9年を経て漸く結論が出る。史跡指定面積は、約29,000㎡になった。

建物跡は3時期に分かれ、2度の建て替えが想定される。大型の柱穴は1.5m、深さは2m程で何れもほぼ同じ位置であり、2棟は掘立柱式、他の1棟は地盤改良されており、頑丈な造りの礎石であった。国庁の周りには諸官庁の国衙があり、更にそれを囲むように庶民が暮らしていた国府があった。

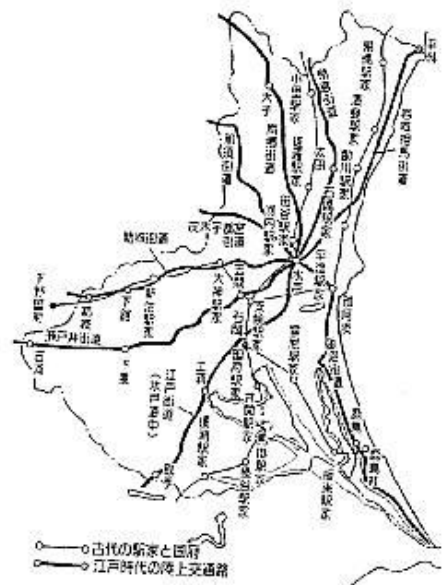
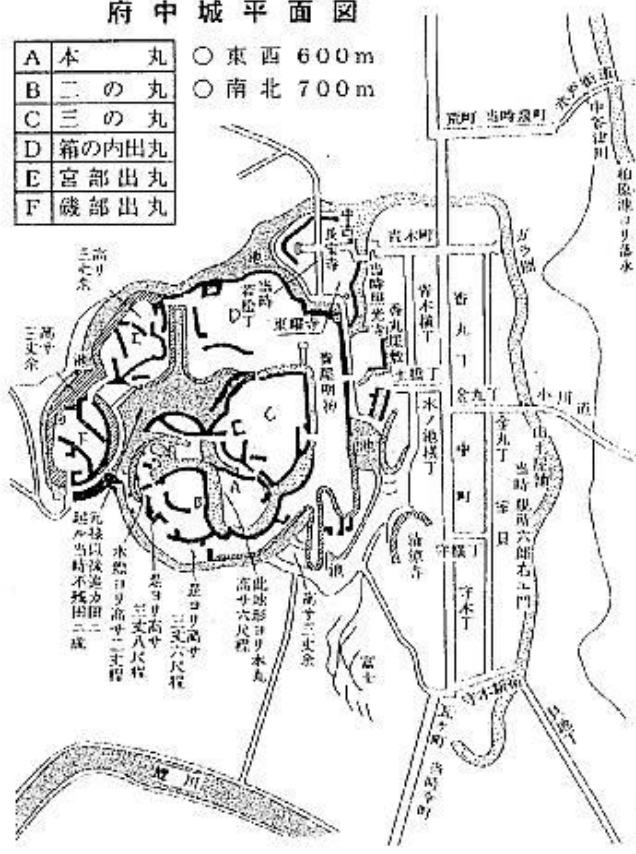
注(1) ①国庁:国の役所の政庁、儀式・饗宴・政務の場。

溝や堀等で区画・遮断される。②国衙:国庁周辺の曹司(実務的施設)を含めた空間。③国府:国衙・国司館・徭丁その他、軍団兵士等の宿所・学校・市場・民家等を含めた空間。



府中城平面図

A	本丸	○東西 600m
B	二の丸	○南北 700m
C	三の丸	
D	箱の内出丸	
E	宮部出丸	
F	磯部出丸	



府中城跡 石岡市総社1-2

府中城の土塁

石岡小学校や石岡市民会館のある付近一帯を指すが、市街化の影響で空堀や土塁の一部が残存しているのみ。城は正平元年(1346)常陸大掾の馬場詮国が府中国衙跡に築城したと伝え、以後八代浄幹まで居城とした。後述の石岡城は外城として、東田中に高野浜城、三村に三村城を構築した。

しかし、天正元年(1573)貞国の代の時、三村城は小田氏治に奪われ、天正19年(1591)佐竹義宣との戦で落城。約250年に亘って受け継がれた大掾家は滅亡し、佐竹氏が城主になる。慶長7年(1602)佐竹氏が秋田に移封後は、六郷政乗・皆川広照らを経て、元禄3年(1700)に松平頼隆が領主となり、府中城三の丸の地域を府中陣屋として使用し幕末に至る。陣屋の遺構として陣屋門、古城土塁、空堀などが残る。

富田町の平福寺には大掾氏歴代の墓という15基の五輪石塔が現存する。花崗岩で出来た最大のものが常陸大掾家の始祖・平国香の墓と伝える。他の14基は、佐竹義宣に滅ぼされるまで、府中城主だった大掾家累代の墓石である。

その城跡は、東西約600m、南北700m、本丸・二の丸・三の丸の他、箱の内出丸・磯部出丸・宮部出丸などを備え、また、掘・土塁を幾重にも廻らしていた。城の西南は断崖をなし堅固な城郭であった。

馬場氏は常陸大掾平国香の8代目の孫・馬場資幹を祖とする。資幹は鎌倉幕府から府中頭職を任じられ、建久年間(1190-99)水戸に馬場(水戸)城を築き、建保2年(1214)今の石岡市街の南方、奈良時代に茨城郡家の置かれていた茨城の地に平城の石岡城を築いたといわれる。現県名は、この郡名から出たものといわれる。

石岡市内の城郭跡

石岡城 石岡市貝地字外城

吾妻鏡の建保2年(1214)に「建久元年(1190)馬場資幹、源頼朝に觀し隨兵となる(略)資幹在庁となるに及び居館を府中に構え、在庁之間は按おぼの地に在って府務を行ふ。石岡城是なり」とあり、府中城の東南1.1km先の南西に突き出た比高10m程の半島状態の所にあつた。2郭辺へらなりに外城の地名が残る。大塚氏の本城が府中に移って後も外城として利用したから、戦国期まで用いられたと想像される。

大塚城 石岡市三村字大塚

切通しの北東側に主郭部らしきものがある。台地比高は10m程。土塁、空堀の遺構は見られない。

小井戸要害 石岡市小井戸字要害山

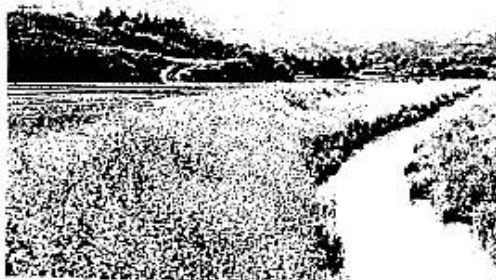
東堀、本堀、元堀の地名が残る。大塚氏一族の居館で府中城の支城の1つと思われる。

高野浜城 石岡市東田中字将監山

数件の民家と畑地の中の比高1m程の台地上に城跡が残る。畑中に土塁が延び、窪みは堀の跡と思われるが全貌は不明。大塚氏一族が家臣の城郭かと推定される。東北に香取神社が鎮座する。

根当要害 石岡市石岡字根当

地形的には園部川の支流に臨む比高5~6m程の台地の南端部にあり、交通の要衝的場所に位置する。大塚氏が佐竹氏に備えた砦か。八幡社祠が残る。



税所屋敷 石岡市茨城

『城郭大系』では茨城地区の万福寺をその跡と推定し、戦国時代頃まで税所氏が居館していたとするが、詳細は不明。

染谷城 石岡市染谷竹下

染谷台地上の畑地に矢場・竹下の地名が残る。竹下は館下のやん砦であり、中世の居館があつたと考えられる。稻荷・鹿島神社、天台宗の総持院があり、大塚氏系ではなく小田氏系の城郭であろう。城主は志筑氏の一族かと推定されているが、土塁や堀切等の城跡らしき遺構は不明。

高浜要害 石岡市高浜字要害

台地の比高は20m程で切り立った崖になっている。石岡城の出城の1つか。高浜小学校との堺に切通し道があり、堀切の跡と思われるが城跡らしきものは不明。

仲丸館 石岡市石川

石川地区に仲丸、西仲丸、堀ノ内という地名があり、鶴ヶ浦町の穴倉に近く、穴倉城と関連の深い長命寺があることから出城と推定される。掘状の水田や中台の池に囲まれた要害の地である。

東大橋要害 石岡市東大橋字要害

台地の比高は5~6m程あり、一面が畑に耕地整理され遺構は見られない。『城郭大系』に東大橋の長者屋敷が掲載され、大橋又兵衛の屋敷とするが同一かどうかは不明。

三村城 石岡市三村字御城

比高20m程の台地上で空堀を3郭程に区画。その主郭部に三村小学校がある。城壁は微妙に折れを見せ近世的な横矢折れを形成した城で、腰曲輪もよく残る。三村城は、石岡城の支城として大塚常春が天正年間の始めに小田氏の備えとして築いたが、同12年(1584)に落城、城主常春も討ち死にしたといい、10年ばかりの短期間であった。

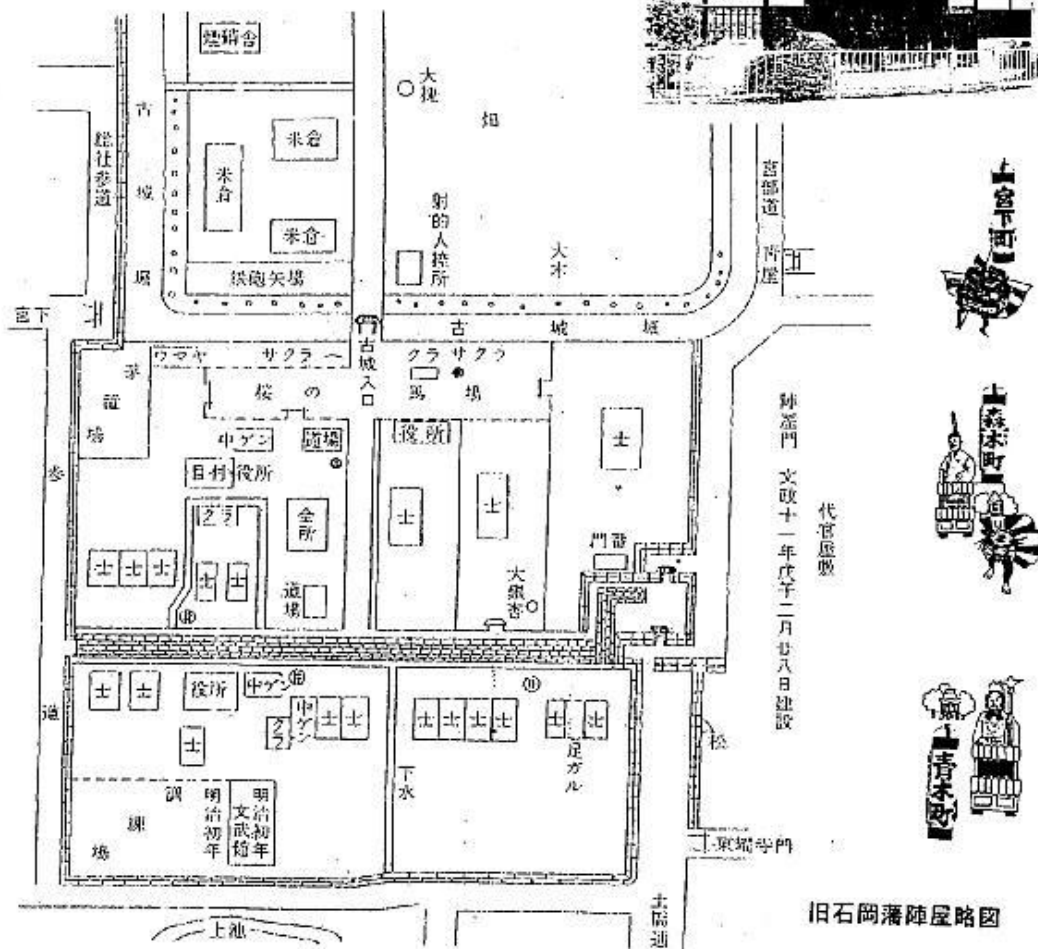
府中松平家陣屋門 石岡市総社1-2-10

元、石岡小学校の校門に利用された陣屋門は、元禄13年(1700)水戸藩祖・徳川頼房の5男である松平播磨守頼隆が、府中藩2万石に封じられたとき、府中城跡に陣屋を構えた遺構で、文政11年(1828)の建造という。

陣屋(陣屋敷)とは、一般に江戸時代に代官等の役人が在住した屋敷や役宅をいい、城郭を持たない小大名の屋敷もこの名で呼ばれる。陣屋は要衝の地に置かれ、多くは堀りを巡らし、門・玄関など一般民家と異なって格式高く造られていた。この門は陣屋門を残す歴史的価値ばかりか、近世の高麗門の遺例としても貴重であるとして、昭和43年(1968)県の文化財に指定される。

府中松平家は、水戸徳川家の分家4藩(高松・守山・穴戸・府中)の一つ。徳川將軍家の一門である御三家の分家は御連枝と呼ばれた。府中松平家は水戸徳川家と同様に定府(大名とその家臣のうち、常に江戸勤めをした者)であり参勤交代がない代わりに、藩主以下大方の藩士(150~200名)の贖費や江戸藩邸の度々の失火等で財政が逼迫し、倭約令が発せられた。府中の陣屋門は、江戸藩邸が焼失した時に再建した際の余材を使って造営されたと伝える。

一方、陣屋には郡奉行や同心など領内の民政を取り仕切る諸役人が詰めたが、その規模は詳びらかでない。



常陸国総社宮 石岡市総社2-8-1

祭神は伊弉諾尊・素戔嗚尊・瓊々杵尊・大国主命・大宮比売命・布瑠大神の6柱。旧県社で、六所の宮、明神様とも呼ばれる。社伝には、天平年間(729-49)、常陸国府の近くに勅命によって大国主命他5神を合祀鎮座したのが始まりとして、古くは国府宮とも称したとある(1)。

国司は国府に赴任すると、国内の主な神社を巡拝する習わしであった。常陸国の一の宮は鹿島神宮だが、高浜の港から霞ヶ浦を船で渡らなければならず、風雨が強く危険なときは、高浜神社を臨時の斎場として遷拝した。後に国府の青屋神社も斎場にしたが、国司の神社巡拝が困難になると、国内神社を一社に勧請した総社宮(国府の宮)を建立し、天神地祇6社を祀り巡拝することで済ますようになる。

当初は、社殿を整えた広大な神社であったといい、大掾氏がこの地に築城したとき壊され北方に遷ったが、滅亡後また元の位置に戻されたという。以来、江戸時代においても藩主松平氏の崇敬社となっていた。

社域は約14,000㎡。社宝に三十六歌仙額、治承年間(1177-81)以後の文書約50点(2)(水戸藩の大日本史編纂に使われたという)、太田道灌と佐竹義宣の軍扇などを所蔵。

例大祭(総社宮祭)は関東三大祭りの一つとされ、元は9月14～16日に行われたが、現在は毎年9月の敬老の日を含む土・日・月に開催される。

注(1) 歴史上は、神護景雲から貞観(767-877)の間に、各国は式内社を国府近くに合祀して国司の参詣の便を図ったことから、常陸総社宮の創建もこの間と思われる。

(2) 中世から近世にかけての文書類。主なものに、総社造営関係、神主と供僧(総社に仕え仏事を奉仕した僧侶)の所領争論、所領譲り状、訴状、国府の指令などがある。元応元年(1319)の常陸国在庁、供僧訴状断簡は、鎌倉時代の常陸国府の組織・構成を示す貴重な資料とされている。



総社宮祭

宵宮は、当番の町に設けた御板屋まで神社に納められている御輿が渡御する。この祭りの呼び物はジャラモコジャンの獅子だが、昔は富田町のササラ、土橋町の大獅子・御輿、木ノ地町の弥勒の他、各町の大獅子や山車など独特の出し物が順に行列に加わった。

当時は、大通りに面した町内が主体で祭りを行っていたが、明治35年(1902)に年番町制度が出来た以降は、現在のように全町参加で行うようになった(実際の参加町内は22、山車は10町内)。

各町の獅子名は、香丸八州、奈輔、府中、若松、金丸、守横、土橋、常陸、で他に三村、染谷が加わって石岡獅子連合保存会を組織し伝承に努めている。昭和55年(1980)県の無形民俗文化財に指定。本祭りには、大獅子と山車が各町内を練り歩く。最終日は、宵宮と同じように大獅子や山車に送られて御輿が神社に還御する。

この祭りの呼び物である大獅子は、縦55cm、横60cm、重さ30kgの頭に、木綿16反を縫い合わせた幌を付けた大きなもの。幌の後方には、獅子方を乗せるため長さ5mの2輪の台車が取り付けられる。獅子頭は青年たちが交互に被り、両足を開いた中腰の姿勢で大きな頭を左右に振る重労働である。また、土橋町の大獅子には、露払いの舞、昇殿の舞が伝承されている。

常陸国分僧寺跡 石岡市府中5-1

国分寺は、天平13年(741)に聖武天皇の勅命(詔)で全国に建立された66カ寺の一つ。尤も律令制の衰退とともに国家の保護を失い荒廃、遺跡すら留めていない処が大方だが、常陸国は尼寺を含め痕跡を残し、讃岐・遠江とともに国の特別史跡に指定される。僧寺は金光明四天王護国の寺とも称し最勝王経を誦読して国土安泰・万民息災を祈願した。各寺には常住の僧20名を置き、封戸50戸、水田10町によって賄われた。

寺域は、東西約270m、南北240mに及び、七堂伽藍の壮大さは東国文化の象徴であったが、天正19年(1591)大塚氏と佐竹氏の合戦により焼失。宝暦年間(1751-64)に幕府の朱印地を受けて再建されるが、次第に衰微して中門跡に建っていた仁王門も明治41年(1908)に焼失。大正11年(1922)に国史跡、昭和27年(1952)には24,823㎡の敷地が特別史跡になるが、大部分を現在の国分寺が占め、その中に中門跡、回廊礎石、基壇羽目板石、金堂跡、講堂跡が残る。

昭和52年(1977)、現国分寺の書院建設に伴って発掘調査が行われ、鐘楼跡と見なした基壇の一部と竪穴式住居跡3軒を確認。住居跡は国分寺造営に携わった工人の小屋であったと思われる。

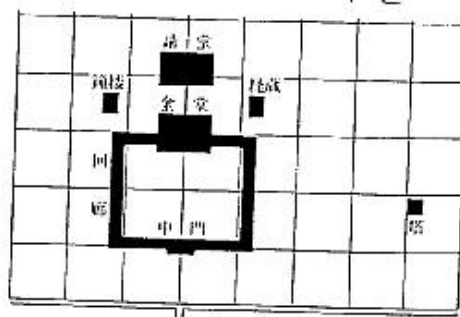
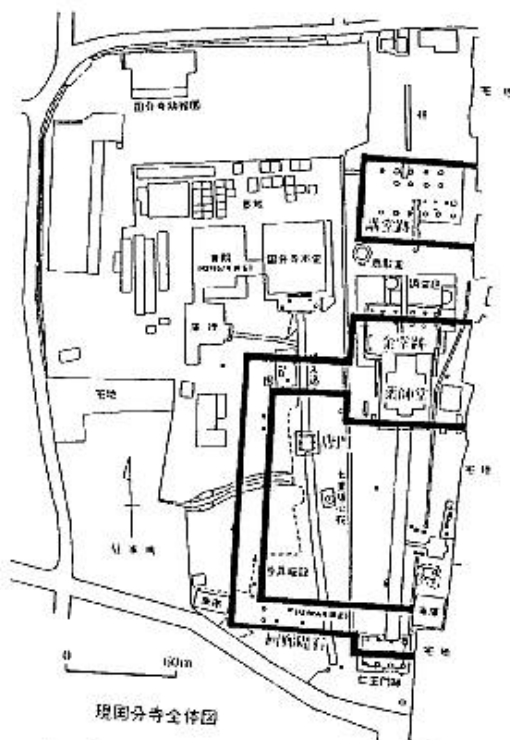
同56年(1981)の調査では、仁王門跡の北側に中門跡の一部を発見、それに接して西に延びる単廊の回廊になる基壇羽目板石と礎石を確認。中門跡は南北9.9m、東西幅約22m、桁行5間、梁間2間の建物と推定された。仁王門跡からは約8m北に寄るが回廊と付合し、回廊に現存する礎石は10個あった。羽目板石は長さ1.2m、厚さ9cmの緑泥片岩と花崗岩で幅は約40～50cm余り。回廊基壇は、地表を整地した上にローム土、小石を少量含む黄褐色土を互層に固めていた。礎石から南側回廊は桁行3.5m、梁間3.1m、西側回廊は桁行3.25m、梁間3.1mと推定される。基壇幅は8～9mあった。

同57年(1982)の調査では、金堂跡と推定した薬師堂の北側に残る礎石群(13基)は薬師堂建立の時に北に平行移動したもので、金堂跡と薬師堂は重なり、同一基壇による構成だったことを確認。基壇の規模は南北幅26.2m、東西幅は現在の寺域より南に延びて33m以上になるが、金堂に接続する回廊は確認できなかった。

講堂跡は、西側と南端を発見し、基壇規模の東西幅は金堂とほぼ同じで南北幅がやや狭かった(礎石20数基)。基壇は金堂跡と同様に固められてあった。

塔跡は、国分僧寺東側の住宅地内に「伽藍御堂」という字名があり、この地が推定される。塔心礎は現在の寺域内に移されている。今後、僧坊や雑舎などの建物跡や寺域を示す溝、土塁などの確認が必要である。

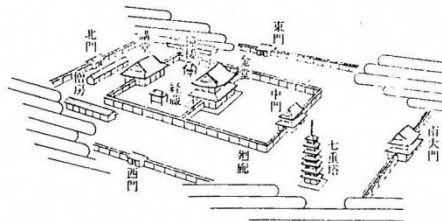
“法の声それとや通ふ国分てふ嶮深き庭の松風”永享・嘉吉年間(1429-43)に太田道灌が参詣の折に詠じたという。



国分僧寺あれこれ

七重の塔の心礎

七重の塔の中央部の礎石(心礎)は、明治34年(1901)国分町の金子源兵衛宅(現青柳新兵衛宅)地内より発掘し泉橋公園(現浜平右衛門宅)に移すが、昭和27年(1952)国分寺境内に持ち込んだ。規模は、長径2.15m、短径1.82m、平面柱座1.02m、臍穴中央径52.8cm、深さ23.1cm、重量推定10t。續日本紀、天平13年3月条に「宜しく天下諸国をして各敬んで七重塔一区を造り并に金光明最勝王經、妙法蓮華經各一部を写さしむ…」とある。



中門跡(仁王門)

南大門と金堂の間に二重層の楼門形式の中門があった。そこに金剛力士が左右に安置されていたので、土地の人たちは仁王門と呼んだが、明治41年(1908)の大火で焼失してしまった。当時、近隣では最高の建物で、楼閣からは筑波の紫峰と霞ヶ浦の碧水が眺められたという。残念!!

出土瓦

創建瓦(複弁十葉蓮華文軒丸瓦)は、平城京羅城門跡の出土品と同系の紋様であり、中央政府の影響が及んでいたようだ。瓦には軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦など多様な瓦が見られ、作り方や文様・出土場所によって年代が相違したり、文様・製造方法から他地方との交流が推測される。

民俗資料館に保存される軒丸瓦は、花卉が単弁と複弁に分けられ、花卉の数も十葉・十三葉・十六葉・十八葉・二十葉と様々である。軒平瓦は均整唐草文様で構成されている。

現国分寺

国分僧寺跡の西半分に薬師如来を本尊とする浄瑠璃山東方院国分寺(真言宗智山派)がある。常陸国分寺が中世末頃から退廃して無住になったため、慶長年間(1596-1615)頃より菩提山千手院来高寺が住職を兼ねた。『府中平邑巡覧記』には「浄瑠璃山国分寺是薬師の別当也(中略)本寺有間敷事に焼失後頽廢して千手院より再興せし由、今は千手院末寺也」とある。その後、大正8年(1919)千手院は現国分寺に合併され、本寺の千手院を廃した。寺宝に日光・月光菩薩像、十二神将木造などがある。域内には、本堂、薬師堂、書院、幼稚園、旧千手院の山門、都々逸坊扇歌を祀る六角堂などがある。

扇歌堂

現国分僧寺境内にある六角形の堂舎。江戸時代末期に都々逸を全国に普及させた都々逸坊扇歌を慰霊するため昭和8年(1933)、全国の芸能人によって建立。堂内には、扇歌が三味線を抱えた等身大の木彫坐像があり、薬師堂の軒には5mもの大三味線が掲げてあった。

扇歌は水戸藩医の次男として文化元年(1804)に現常陸太田市に生まれ、幼名を子之松、福次郎ともいった。父玄策は、扇歌を医者にしようとするが、「親が藪なら私も藪よ藪に驚鳴くわいな」と即興して手こずらせたという。後に養子に出されたが三味線を持って飛び出し、街々を流し歩いたが、江戸に出て落語家船遊亭扇橋に弟子入り。天保9年(1838)初舞台の高座にのぼり、独特な都々逸節を編み出して江戸一の芸人と謳われるほど一世を風靡したという。

人気絶頂だった嘉永年間(1848-54)に、「上は金 下は杭(食い)なし 吾妻橋」と当時の庶民の生活苦を諷刺して幕政を皮肉ったことから、江戸所払いとなり、石岡に嫁いでいた実姉宅(府中香丸町)の旅籠に身を寄せ、常陸一帯を興行したが、嘉永5年(1852)に「歌い尽くして 三味線枕 楽にわたしは寝るわいな」を辞世にして49歳で没した。墓石には「都々逸坊賢叟清居士」と戒名が彫られている。現国分寺の墓地内にその墓が現存している。

常陸風土記の丘 石岡市染谷1646

常磐自動車道を建設中の昭和54年(1979)、周田に多くの遺構が見つかったことから、3年余をかけて発掘調査が行われ、竪穴式住居跡169軒、連房式竪穴遺構5棟、掘立柱建物跡31棟、工房跡19基などの大規模遺跡「鹿の子遺跡」が発見された。それを記念するとともに、石岡に残る歴史的遺産を後世に伝えるため、平成2年(1990)に開園した歴史公園である(1)。

園内は、龍神山の裾野にあり、縄文時代から江戸時代までの代表的な建物の復元や、市内からの出土遺物を展示する。また、日本一の巨大獅子頭(2)の展望台や大賀ハスの群生池を造成する他、しだれ桜・百合・秋桜などで四季折々の賑わいを見せ、それらを生かしたイベントを展開する。

園内で見つかった宮平遺跡出土の巴形銅器は、青銅製の装飾具の一種で、弥生時代後期から古墳時代に掛けて作られたもの(全径5cm、5瓣、14g)。北九州を中心に見つかるが、東日本での出土例は少ないといわれ、盾などに取り付け魔除けとして用いられたと推測する。

東大橋原遺跡は、縄文時代中期の住居跡4軒、土塚48基、古墳時代の住居跡2軒、奈良時代の住居跡1軒などが発見されている。中でも大珠は新潟県で採れる翡翠と一致しており、当時既に交流があったものと考えられる。

染谷古墳群は、龍神山麓に広がり、32基が確認される。多くは径10~30mの円墳だが方墳も見られる。この付近で採取される雲母片岩を箱形に組み合わせた石棺式石室があり、前方後円墳のような大型墳墓が造られなくなった7世紀頃のもので、県内では多く存在する。

鹿の子遺跡の建物群は、住居・工房・官衙の各ブロックに分かれ、武器など軍事的に必要な鉄製品を中心に生産活動が繰り返されていたが、他にも土器・墨書土器・鉄・銅製品・瓦・漆紙文書など多数の遺物が出土している。中でも、漆紙文書は、8~9世紀(奈良~平安初期)のもので、漆が蒸発するのを防ぐための容器の落とし蓋として使用され腐らずに残ったもの。出挙帳、人工集計簿、具中曆、兵士自備戎具(武器)の間関簿などが見つかった。

丸山古墳群の二子塚(前方後円墳)からは、遗体を納めた粘土棺内に内行花紋鏡をはじめ銅鏡、勾玉・管玉・小玉・鉄刀・鉄剣など多数の遺品が副葬されており、4世紀末から5世紀初頭頃の東国地方を知る貴重な資料になっている。

入館料:大人310円、小人150円。開園時間:9~17時(11~2月は9~16時)、休園日:月曜日。

管理団体:(財)石岡市産業文化事業団。

注(1) 風土記の丘の建設場所周辺は、旧石器時代から奈良時代に及ぶ大遺跡が存在したため、昭和63年から平成元年まで発掘調査が続けられた。

(2) 台座からの高さ14m、獅子頭部幅10m、奥行き10m。



常陸国分尼寺跡 石網市若松3-1

国分尼寺は、凡そ290間四方に及ぶ敷地をもち、僧寺と同様、大正11年(1922)に国史跡、昭和27年(1952)特別史跡、その後同47年(1972)に追加指定があり、現敷地総計は28,128㎡を有する。幸い寺域内の殆どは畑地であったため残ったが、南大門付近には府中小学校があり、周辺は宅地化が進んでいる。僧寺と尼寺の間は約700m離れている。尼寺は法華滅罪の寺ともいう。

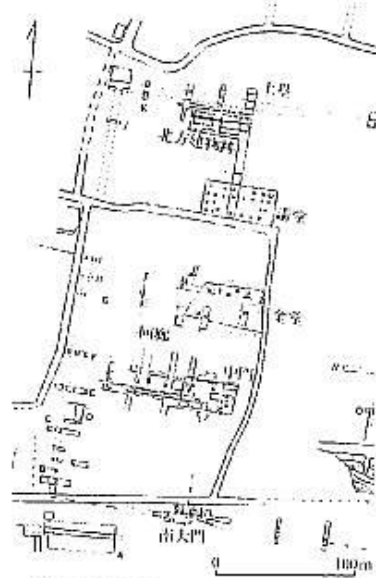
尼寺は一般に僧寺より規模が小さく、金堂に瓦が載る程度で、他の堂宇は草葺きだったと見られ、荒廃が早く全国的にも尼寺跡と確実視される遺構は少ないという。常陸国分尼寺跡は国の特別史跡に指定された唯一の遺構といわれる。

昭和44年(1969)から4次に亘る寺域内の発掘調査が行われ、南大門、中門、金堂、講堂、回廊、尼房などの建物遺構と寺域を囲む四方の溝の遺構を確認。創建時は東西1町、南北1.5町であったことが判明した。

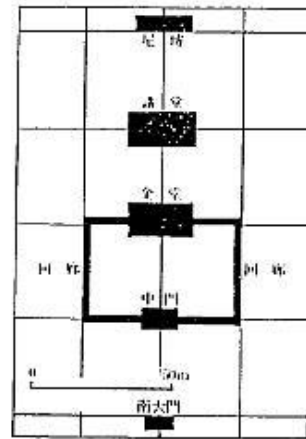
しかし、南大門より少し南側の府中小学校敷地内で南限溝に並行する溝を確認したが、溝は埋め戻されており、創建後に寺域の変遷が2回以上あったとも思われる。伽藍は、中門跡、金堂跡、講堂跡の基壇が一直線に並んで検出され、各々に礎石の一部が残されている。金堂跡は高さ約1mの土壇の上に10個の礎石があり、5間四方の堂宇。講堂跡は高さ30cmの土壇の上に24個の礎石が配列され7間×4間の堂宇であったようだ。

南門は方形掘形の柱穴で、その底面には板状の礎石が見られ、桁行は3間あり各3m間隔。梁間は2間で2.5m前後。中門は残礎5個で基壇周りを確認。中門に投する回廊基壇は西側だけが調査され、僅かな盛り上がりがあり、金堂に取り付くのではなく講堂まで延びるとも想定されるが、付近の遺構状態が悪く確定できていない。

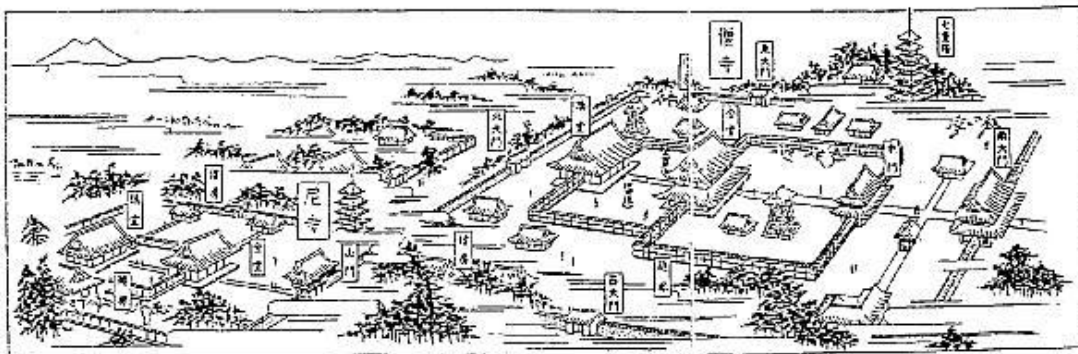
講堂北方の建物跡は、北限溝の内側に並行して柵列内に重複して見られる。この建物はいずれも方形の掘形を持つ柱穴で、組み合わせから2時期が推定される。建物全体は未確認だが、伽藍中軸線を跨ぐように建てられていることから尼房であろうと思われる。



伽藍発掘平面図



創建期の伽藍配置



常陸国分僧寺、尼寺想定図

石岡の一里塚 石岡市石岡 2108、12805

一里塚は文字通り一里ごと(1里=36町=3927m)に築かれた塚である。江戸期の街道には、並木とともに一里塚があり、五街道以外でも脇往還その他主要な街道に見られる。日本では、将軍足利義晴が諸国に令して、塚上に松や榎を植えさせたところがあるのが古い記述である。

しかし、実際に全国に築造されたのは、慶長9年(1604)徳川家康(将軍)が子の秀忠(右大将)に命じ、江戸日本橋を起点として諸道に造らせたことによる。幕府は、大久保岩見守長安を惣督として公料(天領)は代官、私領は領主に沙汰した。その形状は『当代記』に「一里塚五間四方也、関東奥州迄右之通ナリ」とあって、お榎を伏せたような小山の塚上に木を植えさせた。



全国的に築かせた一里塚であったが、修理に関する布達が見られない。同じ街道に残る並木は、立枯や倒木の際に道中奉行などの指示で植栽されるのに、一里塚は修築や補植が十分行われなままに荒廃していった。明治以降まで残ったものでも、道路の拡張などで多くは失われ、今日では両側に見られるものは、全国的にも珍しいほど減少した。

石岡の一里塚は、旧水戸街道(現県道52号線・石岡城里線)の両側に残るもので、江戸・日本橋から23里目(約90km)に当たった。特に東側の塚の上に植えられた榎の樹勢が良かったが、平成14年夏の台風で折れてしまい、現在は根本の幹のみを残す。高さ20m、幹周り4.2mあって、樹齢は約400年とも語られていただけに、地元民はとても残念がった。昭和33年(1958)県指定。

昭和30年(1955)頃までは一里塚から2km程先まで行里川（なごり川）に向かって樹齢250年にもなる杉並木が両側に続いていた。水戸藩分家の松平氏が入封したとき、幕府より杉の植樹が許可されたものという。杉並木は鬱蒼として周囲は土盛りされており昼でも暗かったことから、町の開発とともに何時しか無くなってしまった。今でも地名に「杉並」が使われている。また、杉並4丁目付近には水戸殿の休憩場といわれた200坪程の「茶屋場」跡があったが、今は「茶屋場住宅」と化して名前が残っている。

水戸街道

江戸から水戸に至る街道で、水戸道・水戸道・水戸道ともいうが、水戸からは江戸街道と呼ぶ。また、新宿から佐倉への道と合わせ水戸佐倉道といわれたり、岩城街道と接続し明治以降は陸前浜街道と称している。水戸街道は五街道に次ぐ脇往還として重視され、松戸に關所が置かれた。

水戸街道を参勤交代に利用した大名は、常州、下総、上総の諸藩で文政5年(1822)には23家あり、東海道、奥州道中、中山道に次ぐ。しかし、実際には奥州の諸大名も混雑する奥州道中を避けて利用したようで助郷負担が増大し、文化5年(1808)には牛久地方55ヶ村の農民約6千人による助郷過重反対の百姓一揆が起こっている。

宿駅は、江戸-千住-新宿-松戸-小金-安彦-烏手-藤代（たかひら）-若柴-牛久-荒川-中村-土浦-中費-稲吉-府中-竹原-片倉-木幡-長岡-水戸と続く。千住-新宿間には中川、新宿-松戸間には江戸川、安彦-烏手間には利根川、藤代-若柴間には鬼怒川(現小貝川)の舟渡しがあった。

一里塚は、入地、田宮、東端穴、中村、土浦、真鍋、稲吉、下土田、府中、竹原、片倉、木幡、奥谷、長岡、木沢新田などに設けられていたが、今は石岡と水戸にのみ現存する。

舟塚山古墳 石岡市北根本597外

霞ヶ浦の両岸には多くの古墳群が遺っており、その中央部の恋瀬川河口に沿う標高約20mの台地西端に面して舟塚山古墳がある。墳丘からは、南に霞ヶ浦の高浜入江を望み西には筑波の靈峰を仰ぐ景勝地である。東国第2位、茨城県内では最大規模の前方後円墳であり、現在の新治・行方・稲敷3郡を含めた地域の大豪族の墳墓と見なされている。しかし、大正10年(1921)には国史跡に指定されたことから今以て発掘の許可が降りないため、正確な実態を掴めないでいる。

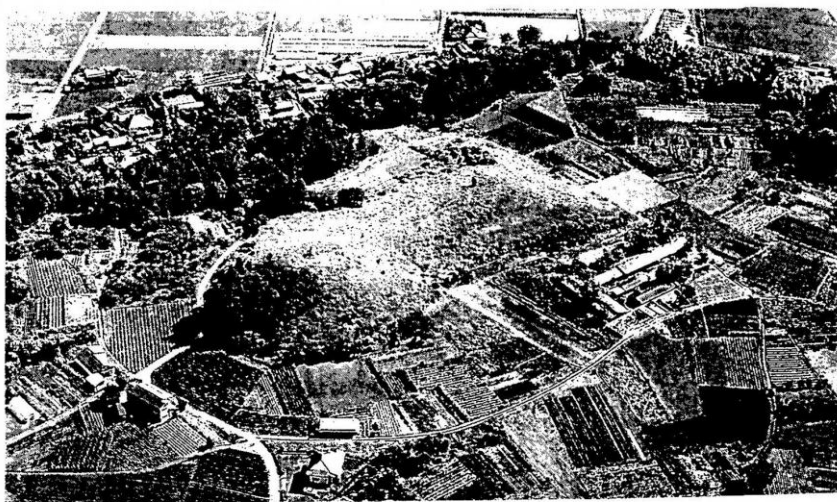
封土は3段に積まれ蓋石はない。後円部登り口に鹿島神社、墳頂中央部に34.7mの三角点がある。全長約186m、前方部幅100m、後円部径90m、前方部高10m、後円部高11mで後円部径に比し前方部が長く、仁徳天皇陵(大阪府)や宇和奈邊古墳(奈良県)などに共通する特徴を有している。

周囲に幅約37mの堀を廻らすが、台地の南側は傾斜面に続くので、北側と同様の規模で廻らすことが出来なかったようである。明治末年、国有林払い下げの時、前方部の表面が開墾され多数の埴輪や刀剣が見つかったという地元民の話があるほか、昭和47年の調査では円筒埴輪が出土している。また、周囲に4個の陪家はいけと思われる円墳など25基の墳墓が確認されるが、17号墳から木棺が発見され短甲・直刀・皮製楯などの副葬品も出土している。そうした遺物や墳形なども合わせ見て、凡そ5世紀後半の築造とし、被葬者は茨城国造筑紫刀禰ではないかと推定されている。

短甲は鉄製鎧で何枚もの帯状の鉄板を鋸で留めて作られている。盾は表面に編物のような繊維質が見られ黒漆が塗られており、その上に朱で文様が描かれている。直刀は3振りで、ともに腐食が激しい。

舟塚山古墳とは300m程の距離に愛宕山古墳(県指定史跡)がある。霞ヶ浦に舟を乗り出すような位置と方向から「出舟」と称された(逆に舟塚山古墳は「入舟」と呼ばれた)。全長約96m、後円部・前方部とも径57mの規模で、明治30年の坪井正五郎氏の調査では土師器の壺7個(無紋素焼)が発見されたと伝わるが詳細は不明。また、昭和54年に周濠調査が行われ、周濠幅は16~24m、円筒埴輪や形象埴輪片なども出土している。霞ヶ浦周辺において舟塚山古墳に次ぐ有力者の墳墓であろうと推測されている。付近には数十基の小古墳が散在し、出土遺物に猿の埴輪さるのうづしの首、五鈴釧、翡翠製の勾玉などが出土している。

他にも、石川古墳群・井関古墳群、三村の大塚古墳群・水内古墳群、染谷の後生車・染谷古墳群、東大橋の上坪・東大橋けいせい・傾城・七人塚の各古墳群、小井戸の権現山・要害山古墳群などがある。



常陸國風土記

常陸國司解。申_レ古老相傳舊聞事。
問_レ國郡舊事。古老答曰。古者自相摸國足柄岳坂_一以東諸縣。摠稱_レ我姬國。是當時不言_レ常陸。唯稱_レ新治筑波茨城那賀久慈多珂國。各選_レ造別_一令_レ檢校。其後至_レ難波長柄畷前大宮臨軒天皇之世。遣_レ高向臣。中臣幡。織田連等。摠_レ領自_レ坂以東之國。于時我姬之道分爲_レ八國。常陸國居_レ其一矣。所_レ以然號_レ者。往來道路。不_レ隔_レ江海之津濟。郡鄉境堺。相_レ續山河之峰谷。取_レ近通之義。以爲_レ名稱_レ焉。或曰。倭武天皇巡_レ狩東夷之國。幸_レ過新治之縣。所_レ遣國造毗那良珠命。新令_レ掘_レ井。流泉淨澄。尤有_レ好愛。時停_レ乘輿。盥_レ水洗_レ手。御衣之袖垂_レ泉而沾。便依_レ漬_レ袖之義。以爲_レ此國之名。風俗諺曰。筑波岳黑雲挂衣袖漬國是也。
夫常陸國者。界是廣大。地亦緬邈。土壤沃墳。原野肥衍。墾發之處。山海之利。人人自得。家家足饒。設有_レ身勞_レ耕耘_レ力竭_レ紡織_レ者。立即可_レ取_レ富豐。自然應_レ免_レ貧窮。況復求_レ鹽魚味。左_レ山右_レ海。植_レ桑種_レ麻。後野前_レ原。所謂水陸之府藏。物產之膏腴。古人曰_レ常世之國。蓋疑此地。但以_レ所有水田上小中多。年遇_レ霖雨。卽聞_レ苗子不登之難。歲逢_レ亢陽。唯見_レ穀實豐稔之歡。不_レ略_レ之。

參考資料

- ① 茨城県の歴史(山川出版刊 1975年)、② 常陸と水戸街道(吉川弘文館刊 2001年)
- ③ 常陸國風土記に見る古代(学生社 1989年)、④ 郷土資料事典8茨城県(人文社刊 1999年)
- ⑤ 茨城県大百科事典(茨城新聞社刊 1987年)、⑥ 藩と城下町の事典(東京堂出版刊 2004年)
- ⑦ 関東の道(関東建設弘済会刊 2005年)、⑧ 古代の役所(岩波書店刊 1985年)
- ⑨ 函説日本の史跡5古代2(同朋舎刊 1991年)、⑩ 日本図説大系関東Ⅱ(朝倉書店刊 1985年)
- ⑪ 日本地誌5関東地方総論(二宮書店刊 1941年)、⑫ 風土記探訪事典(東京堂刊 2006年)
- ⑬ 古代東国と常陸風土記(雄山閣刊 1999年)、⑭ 風土記-日本古典文学大系(岩波書店刊 2006年)
- ⑮ 角川日本地名大辞典8茨城県(角川書店 1983年)、⑯ 都道府県名の由来(東京書籍刊 20091年)
- ⑰ 茨城県の地名日本歴史地名大系6(平凡社刊 1982年)、⑱ 郷土茨城の歴史(ぎょうせい刊 1996年)
- ⑲ 石岡市史上巻(石岡市刊 1979年)、⑳ 同中巻1(同左刊 1983年)、㉑ 同下巻(同左刊 1985年)
- ㉒ 石岡の歴史市制三十周年記念(石岡市刊 1984年)、㉓ 石岡のおまつり(同市観光協会 2010年)
- ㉔ 常府 石岡の歴史(石岡市教育委員会刊 1997年)、㉕ 歴史の里いしおか(同左刊 1994年)
- ㉖ 石岡の地誌(同上刊 1986年)、㉗ 石岡の歴史と文化(同左刊 1996年)
- ㉘ その他、石岡市各機関・施設等発刊パンフレット
- ㉙ ウィキペディア他、インターネット情報